ザマミロ、のちょっと先、もしかしたら一歩手前

いちは

知らないところで、知らない誰かが、知らない人たちを殺した。
その理由は、どうやら大したことはないどころか、被害者と知り合いでもないらしい。
加害者らは、事件当時は少年だったけれど、それでも死刑判決が確定した。
ざまぁみろ、少年法なんてクソっくらえ、と思う。

亡くなった人たちはかえってこない。
彼らは苦しんだだろう。
きっと涙もよだれもこぼしながら。
今までに体験したことのない痛みや苦しみがあったにちがいない。
彼らは悲しんだだろう。
自分の好きな人、友だち、家族らを思い浮かべて。
恋人や友人や父母の泣き顔、もしかしたら笑顔が、思い起こされたかもしれない。
もしかしたら、彼らは後悔したかもしれない。
あの時あの場所にいなければ良かったと。
朝の寝起きの数秒の差だったかもしれない。

そんないろいろなことを考えながら、彼らは息を引き取ったのだろう。
加害者らは、そんなこと思いもしなかったはずだ。
大した目的もなく、見知らぬ人の命を奪った。
その人の恋人や友人や家族の未来も奪った。
中には、もう一生立ち直れない人たちだって大勢いると思う。
忘れたことにして、だけど殺人事件のニュースを見るたびに思い出す人もいるだろう。
加害者が奪ったのは、命だけではない。
希望や期待、喜び、快感、ときめき、愉しみ、そういったことが詰まっていて、
絶望や裏切り、悲しみ、不快、落胆なんかが待ち受けている、そういう未来を、
まるごとごっそり奪ってしまったのが彼らだ。
殺された人たちは、きっと恋人や家族ｔとケンカもしただろうし、
誰かを叱ったり叱られたり、褒めたり褒められたり、笑ったり笑われたり、
時には自ら死にたいなんて思うくらいの辛いことだってあっただろう。
それでも被害者らはそんな毎日を生きていて、そして、そんな日々を奪われた。

死ね。
加害者は全員、死ね。
そう思う自分がいる。
その感受性が間違っているとは思えない。
だけど、いや、だからこそ、なのかもしれないが、一瞬だけ立ち止まりたい。
考えることさえ忌々しいが、加害者にだって恋人も友人も家族もいたはずだ。
彼らは今、どう思い、どう過ごしているのだろう。

加害者少年らが奪ったものは、被害者らの未来だけではない、はずだ。

うまくは言えない。
被害者への哀悼の気持ちは深いし、加害者への同情なんて微塵もない。
明日死ね、早く死ね、首をつれ、舌を噛め、そんなことすら考える。
それでも、加害者少年たちの恋人、友人、家族に思いをはせたとき、
加害者たちなんか早く死ねと思っている自分自身は、ただの第三者なのか、
それともじつは加害者なのか、もしかしたら被害者なのか、分からなくなる。

知らない誰かの死を悼む一方で、
知らない誰かの死刑判決に満足する自分は、
いったいぜんたい、誰なんだろう。